

1000年 続くまちへ。

大丸有 CSR レポート 2011



大丸有環境ビジョン

『1000年先まで、いきいきとしたまちでありたい』——

2007年5月に発表された「未来へつなぐまちづくり大丸有環境ビジョン」にはそんな願いが込められています。私たち大丸有は、多くの皆さんとこのビジョンを共有しながら、持続可能なまちづくりを進めていきます。

気づいて、変わっていくまち



大丸有は、最先端の技術による省エネルギー・省資源に取り組んでいます。それに加えて大切なのが、「人」の意識と行動。環境対策をさらに加速するため、テナント企業や就業者・来街者など、人々の意識や行動を喚起していきます。

コミュニティ全体で世界の課題に取り組むまち



100年以上にわたる先進的なまちづくりの経験と、その過程で培われた関係者間の強いコミュニティ意識は、大丸有地区の貴重な財産です。企業単位のCSR (Corporate Social Responsibility) の実践はもちろんのこと、「大丸有コミュニティ」によるCSR ("Community" Social Responsibility) を果たしていきます。

世界へ、いい波紋を広げるまち



大丸有は、グローバル企業の本社機能が集積した地区。大丸有地区で行われるさまざまな意思決定は、世界に大きな影響を与えます。そのため、ここから波紋を広げるように、地球環境問題など世界の持続可能性のために積極的に貢献していきます。

時代に応じて「自己進化」するまち



時代が変われば、まちに必要な機能や施設も変わるもの。そこで、時代にあわせて「進化」し続ける柔軟性を持ったインフラ（社会基盤）を備えたまちを目指します。特に、「トップランナー方式」によって、その時代の最も環境効率の高い施設・機器を柔軟に選択・再編できるユニット型のシステムを導入していきます。

大丸有の環境向上を担うエコツェリア協会はその活動が認められ、地球温暖化防止活動環境大臣賞（平成22年度、環境教育・普及啓発部門）を受賞しました。



「大丸有環境ビジョン」の概要をまとめた小冊子（PDF）を右記よりダウンロードできます。

自分の「体調管理」をきちんとするまち



ICT (Information & Communication Technology) を活用し、大丸有全体の気象をリアルタイムに観測しながら、エネルギー使用量をモニタリングします。いわば「都市の神経系」の構築。これを、人の意識と行動を喚起するための「気づき」の手段として活用していきます。

自然とのつながりを大切に、緑や生きものにぎわうまち



大丸有地区には東京湾へと流れ込む河川が通っており、川上から川下まで続く、広範囲にわたる生態的なつながりがあります。こうした自然との関係性を大切に、豊かな緑の中を鳥や虫たちが行き交うような、緑や生きものにぎわうまちを目指します。

他の地域に支えられていることへの、責任をはたすまち



大丸有は、エネルギーや食料だけでなく、そこで働く人々も、他の地域に支えられて成り立っているまちです。こうした地域の範囲はいまや世界に広がっています。そのため、これらの地域とのつながりを認識し、影響を捕捉していきます。

みんなが安心・安全に過ごせる快適なまち



将来的には、地震・都市洪水・テロなど、さまざまな都市災害が考えられます。こうしたリスクに対しても都市機能が寸断することのないまちのインフラ（社会基盤）を構築していきます。平常時には、そうしたインフラがアメニティや物流のためのスペースとして活用されるなど、多面性を持ったまちを目指します。

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会
<http://www.lares.dti.ne.jp/~tcc/>

編集方針

制作にあたっての考え方

「親しみやすく、わかりやすいこと」

大丸有がCSRを推進するためには、地権者・ビルオーナー、テナント、就業者、行政、インフラ事業者、来街者など、できるだけ多くの関係者（ステークホルダー）とともに歩いていくことが大切です。そのため、広く一般の人びとに手にとってもらえるよう、私たちの目指すビジョンや取り組みをできるだけ親しみやすく、わかりやすく伝えるよう編集しています。

「大丸有の未来像と役割を探ること」

大丸有の未来像と役割を探るため、多くの有識者やステークホルダーの皆さんにご意見をいただきました。

2050年へのまなざし P.06
大丸有に関わる人びと P.30

「大丸有の現状を紹介すること」

大丸有の主な取り組みと現在の姿を、具体的な活動や数値等を交えながら紹介しています。

トップコミットメント P.14
2010年度のCSRアクション P.16
大丸有の健康診断 P.34

報告範囲

東京都千代田区の手町、丸の内および有楽町の地域を報告範囲としています（大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会が定める一部の地区を除く）。

報告期間

原則として、2010年4月1日～2011年3月31日の取り組みについて報告していますが、一部それ以降の活動や計画についても記載しています。

【発行日】 2011年7月（次回発行予定2012年6月）

【お問い合わせ】 大丸有コミュニティSR推進委員会事務局（エコツェリア協会内）
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル10階
TEL：03-6266-9400 FAX：03-6266-9401 Email：csr@ecozeria.jp

【発行主体】 大丸有コミュニティSR推進委員会
大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会
〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル6階 <http://www.lares.dti.ne.jp/~tcc>
特定非営利活動法人大丸有エアーマネジメント協会（リガーレ）
〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル635区 <http://www.ligare.jp>
エコツェリア協会（一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協会）
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル10階 <http://ecozeria.jp>
三菱地所株式会社
〒100-8133 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル <http://www.mec.co.jp>

短期的・局所的な効率ばかりでなく、中長期的に大事な

「何かあってもしなやかに 立ち上がる力（レジリアンス）」を評価・重視

し、社会のさまざまな構造に織り込んでいくことから、
日本は本当の意味で幸せで持続可能な国になれる。

枝廣 淳子

幸せ経済社会研究所所長

地元の材料、
職人のワザを使って、
場所の力を
とりもどしたい。
たとえば東北の和紙で作った扇子、家具、家。
東北の場所の力を世界へ向けて発信したい。

隈 研吾
東京大学教授・建築家

放射能汚染地域の住民や子どもたちには、
父祖の地を捨てて新天地に移住する、
苦渋の「百年疎開」が求められています。

それはまさに、

現代版「ノアの箱舟」。 このリアリティを 社会共有する

ことが最重要の喫緊の課題だと考えます。

赤池 学

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長

大丸有と被災地は同じ空の下にあります。

大丸有のCSRに関わる方々から、

メッセージをいただきました。

震災が明らかにしたのは、
経済効率重視でありに一極に集中した
国、産業、生活のあり方の弱さです。
自分たちのことは

なるべく自分たちで
何とかする。

そんな自立した
コミュニティを再生
させましょう。

足立直樹

(株)レスポンスアビリティ代表取締役

これまでも、 これからも、 ニッポン

災害の前よりも良い社会をつくること。

それが被災された方々、

そして未来を担う次世代に対する私たちの責任。

単なる復旧ではなく、今こそ日本の叡智を集め、

人間起点、 自然共生、 持続可能な 新たな社会の復興を 目指そう。

小宮山 宏

(株)三菱総合研究所理事長

戦後、復興という名のもと経済や技術で
世界を引っ張ってきた日本。

この震災後、復興という名のもと我々は
何を伝えていくのでしょうか？

環境、経済、農業、教育、医療と、これまで

分割されていたものを

統合していった先に、

新しい世の中の豊かさを
提唱していくのが日本の役目なのかもしれません。

古田 秘馬

(株)Sai代表取締役

私たちが、慄然、悄然たる思いを乗り越えて、
如何なる復興の途を歩むのか世界が注目しています。
ジリ貧を恐れてド力貧になる愚に陥ることなく、
焦らず、怒らず、
ひとつ、またひとつ、
未来への希望の種を
蒔いてまいりましょう。

野城智也

東京大学生産技術研究所教授、所長

圧倒的な自然エネルギー
+少エネルギー消費先進国に
生まれ変わるチャンス！

東北地方に 自然エネルギーを活用した 新しい産業を

次々と興しましょう。

そのバックアップのためなら、

デザイナーは智慧も技術も提供します。

益田 文和

(株)オープンハウス代表取締役・

東京造形大学教授

応援しています！ エコツェリア会員企業

東日本電信電話株式会社／NPO 法人大丸有エリアマネジメント協会／大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会／株式会社日本政策
投資銀行／株式会社東京国際フォーラム／株式会社サンケイビル／大成建設株式会社／東京ガス株式会社／東日本旅客鉄道株式会社／丸の内
熱供給株式会社／三菱地所株式会社／三菱商事株式会社／株式会社三菱東京UFJ銀行／旭硝子株式会社／株式会社大林組／鹿島建設株式会社／小
岩井農牧株式会社／清水建設株式会社／株式会社ジェイアール東日本企画／株式会社竹中工務店／財団法人電力中央研究所／株式会社ティップネス／
有限責任監査法人トーマツ／戸田建設株式会社／パナソニック電工株式会社／株式会社日比谷花壇／三菱電機株式会社／株式会社三菱地所設計／ヨシ
モトボール株式会社／株式会社イトーキ／東テック株式会社／リコージャパン株式会社／特定非営利法人屋上開発研究会／一般社団法人産業人文学
研究所／株式会社クリーン／NPO 法人都市環境フォーラム（フォーラム環境塾）／一般社団法人ロハスクラブ／ロハスビジネスアライアンス

2050年へのまなざし

環境の向上や持続可能なまちづくりのために、大丸有はどうあるべきか。

長い歴史を踏まえ、未来を見すえる。

たとえば2050年の社会を想定したとき、大丸有が魅力あるまちであり続けるための方策を各分野の先駆者の方々に伺いました。



村上周三 独立行政法人 建築研究所理事長

- ハードの集積と多様なサービスの提供が「都市の魅力」を生む
- 経済波及効果に注目して社会全体の利益最大化を目指す
- 人間的感覚を大切に世界を惹きつけるまちづくりを

P.08



井口典夫 青山学院大学総合文化政策学部教授

- 多様で異質な人たちとの交流で新しい価値の創造を
- フラットな組織とゆるい空間がクリエイティビティを生む
- 海外ネットワークを強みに世界への玄関口としての役割を果たす

P.10



生瀬勝久 俳優

- 「省かず」「気概を持って」楽しむことで活力が生まれる
- 一見、無茶なアイデアの中にブレイクスルーがある
- 仕事のチャレンジとともに人生を楽しめるエリアに

P.12



「人が主役となるまち」と
「多様で上質なサービス」がある
世界レベルのビジネスセンターへ

村上周三 独立行政法人 建築研究所理事長

人間と都市・建築のサステナビリティ追求を通して、魅力ある都市をつくるため必要なコンセプトとは。

**多様なサービスの提供が
都市の魅力を生む**

大丸有地区は20年以上、協議会をつくって官民合意型まちづくりを進めています。現在の高評価の一端は、江戸時代の大名屋敷の区割りをそのまま活かしながらエリアを一体的に整備してきたことにあります。日本全国を見渡してみてもビジネスセンターとしてこれだけ整っているのは大丸有だけではないでしょうか。個々の建築主の主権が強い日本では、景観を統一した美しいまちづくりがなかなかできません。ですからパリなどと比べ常々日本の都市の景観は貧弱だと言われてきました。しかし、こと大丸有に関してはエリアとしての統一性が十分に達成されています。しかもそれを民間の力で実現している。これは素晴らしいことです。大丸有はまさに東京のビジネスエリアの代表格ですから。大丸有のまちが日本の都市のあり方の一つのモデルだという意識で今後とも一層優れたまちづくりを進めてほしいと思います。

ところで、東日本大震災を機に、都市機能の分散化議論が出ています。防災・セキュリティの観点からすると、確かに分散化は検討課題の一つです。ただ「都市の魅力」と防災は別です。なぜなら都市の魅力は、ハード的にもソフト的にも“集積”が大きな効果をもたらすからです。発達した交通網や快適な通信環境といったハード面の充実とともに、金融や法務等専門分野をはじめ医療や教育面の問題も含め外国人が満足できるサービス水準の質と量が魅力の源泉です。ビジネスから日常生活まで上質なサービスが提供されれば世界中の優秀な人材、資本が集まり

だす。ヒト・モノ・カネが集まるようになれば、そこに新しい価値が生まれる。新しい価値が生まれると、また人が集まってくる。この好循環のダイナミズムが、東京などのグローバルシティと呼ばれる都市の魅力の源泉なのです。

**経済波及効果に注目して
社会全体の利益最大化を**

今回の大震災を機に、節電対策が求められていますが、今後のエネルギー供給の仕組みやエネルギーの使い方に関しては、もっと活発な議論が必要でしょう。その際のキーワードの一つが「分散化」です。既に空調ではセントラル方式から分散型のビル・マル方式への転換が進んでいます。電力の分野ではまず電源の分散化の議論が想定されますが、検討のポイントは電力供給の安定性、防災性、省電力化や低炭素化への貢献等が考えられます。私はさらに他産業への経済波及効果にも注目すべきであると考えています。

たとえば、アメリカではダイナミック・プライシングというサービスの導入がグリッド網の建設やスマートメーターの普及を後押しし、スマートシティという形で大きな経済効果を生み出しつつあります。最終的には分散と集中を有機的に連携させるといった解決策が有効かと思いますが、社会全体の利益最大化を目指す上で何が一番合理的か、聖域を設けずに議論し、合意点を見出すべきであると思います。

経済波及効果に関しては、政府が掲げる環境未来都市構想のテーマの一つでもある「健康」に関連して面白いデータがあります。たとえば断熱住宅と非断熱住宅とは新築の際に100万円

むらかみ・しゅうぞう

1942年生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。工学博士。東京大学生産技術研究所教授、慶応義塾大学理工学部教授などを経て、2008年4月より現職。この間、建築環境・省エネルギー機構理事長、国土省中央建築士審査会会長、日本建築学会会長、空気調和・衛生工学会会長などを歴任。研究分野は計算流体力学、建築・都市環境工学、地球環境工学、サステナブル建築など。



くらい初期費用の差があります。これを暖房費用の削減分だけで回収しようとする30年程度かかります。しかし一方で、断熱住宅に住む人はカゼをひきにくくなる。カゼをひくと薬代や診察料が発生します。断熱住宅ではこのような健康維持の費用が削減されず。私はこのような便益を、省エネというエネルギーの直接的便益でないという意味で、ノンエナジー・ベネフィットと呼んでいます。快適性や健康がもたらすベネフィットです。病気になりにくい、よく眠れる、そういう便益を金額換算して投資回収年数を計算すると約16年で回収できる計算になります。

健康増進の便益は個人にとっての利益にとどまりません。医療費は国が7割を負担しており、国にも大きなメリット、ひいては税金を納める国民全体の利益にもつながります。海外を含め優秀なナレッジ・ワーカーに選んでもらう意味でも、健康サービスは大切です。

**まちづくりに大切な
人間のスケール感**

世界各国の都市を見て思うのは、自動車が発達する前に歴史を重ねてきたまちには心地良い空間が多いということです。アメリカの都市のほとんどは自動車による移動を前提につくられています。私の感覚ではどうしてもヨーロッパの都市のほうが魅力的に感じられます。一体その魅力はどこからきているのか。その主なる源泉は“スケール感”であると思います。ヨーロッパの歴史あるまちは自動車文化に耐えるだけの強さがあり、100%スポイルされなかった。人間が自分の足で行動するのに最適なスケール感を大事にして

います。歴史の積み重ねを蔑ろにせず、むしろそれを尊重しながら時代に適合させてまちを進化させています。

いいコミュニティをつくることは大変難しいものです。日本で顕在化しつつある昔つくったニュータウンのコミュニティ崩壊問題は、モータリゼーションと無関係ではありませんが、むしろ開発の進め方にも原因があります。高度経済成長時代のニュータウン開発の多くが、一気に団地を建てて短期間に一斉分譲したため、時代とともに一緒に高齢化してコミュニティが成り立たなくなっているのです。それと対照的に、千葉のユウカリが丘ニュータウン（千葉県佐倉市）のように非常にうまくいっている例もあります。最初にモノレールなどインフラを整備し、戸数を限定しながら段階的、継続的に分譲してきたため、若年層の人口も多く、幅広い世代構成になっています。

いずれにしても、コミュニティの崩壊はエリアのサステナビリティを損なう深刻な問題です。ビジネスセンターでありながらサステナブル・コミュニティを指向する大丸有の取り組みは、ハードルは高いかもしれませんが大変意義深く、世界の模範になり得るものです。自動車中心ではなく、人が主役となるまち、安心安全で歩きやすい快適なまち、人と人との交流が盛んで社会的連帯感の強いコミュニティになってほしい。そのためにはヒューマンスケールでまちをデザインしていく必要があります。明治以降、日本の近代化と経済発展を牽引してきた歴史を大切にしつつ、これからの日本の発展のために世界中のビジネスパーソンを惹きつける魅力あるまちづくりの努力を今後も続けてほしいです。



フラットな組織とゆるい空間が都市のクリエイティビティを進化させる

井口典夫 青山学院大学総合文化政策学部教授

クリエイティブ・クラスが主導する経済の行方とともに、クリエイティブ・シティが注目を集めている。大丸有がその潜在的な機能を発揮して、エリアの価値を高めるには。

クリエイティビティの母体はコミュニティ

クリエイティブ・シティには「集積→交流→展示→創造→発信」といった機能のサイクルが内在しています。大丸有の特徴をハード面から見ると、先端的なビルが集積し、多くの人が集まっていますので、集積・交流においては一定のレベルに達している。次は展示でしょうか。たとえば都市空間の面白いつくり方や使い方のモデルを多くの人々に見てもらおう。そこに四番目の創造機能が加われば、さらに存在価値が高まるでしょう。

一方、ソフト面から見たとき、三つの特徴をあげることができます。第一に知的で均質な人材が集まっていること。高学歴のビジネスパーソンですね。第二は日常生活や社会一般との距離感があること。第三は海外との緊密なネットワークがあることです。第一と第二の特徴は裏表の関係にあります。同質・同レベルの人たちとの交流は、共感が得られやすく効率的である反面、そこから社会全体を大きく変えるようなものを創造するのは難しいのではないか、と見ています。

第三の海外ネットワークは大きな強みですね。大丸有にはグローバルに事業を展開する企業が多く、海外での経験が豊富な方も多いでしょう。ですから、海外から見て日本として、いま何が注目されているのかを、ほぼリアルタイムで感じとれる。それを企業の現場サイドや一般の生活者につなげることができれば面白いと思います。そのために、多様で異質な人たちとの交流を積極的に図っていく必要を感じます。丸の内朝大学は、エリアの創造機能

を高めることにもつながり得る興味深い取り組みです。受講生は、そこで得た知識や情報を自らの生活の場において実践し、活用してみる。そこから一般の生活感覚で物事を見ることができるようになり、その感性が職場にフィードバックされる、といった構図が期待されます。

クリエイティブ・シティをつくること自体を目的にすると、それは「仕事」になってしまいますし、思うような結果を出すことは難しいでしょう。むしろ、ビジネスパーソンが個人として共感でき、それぞれがやりたいことができるようなコミュニティをつくってあげれば、それが自然とクリエイティブ・シティにつながっていくのです。

この時代、大丸有が真剣になって取り組めることを例示するならば、それは「防災」と「エネルギー」でしょう。日頃の安全・安心のためなら、企業の論理で考えても真剣に参画、交流できる。都市の防災性の向上やエネルギーを浪費しない生活、あるいは自然エネルギーの開拓に関連する知識・技術・ノウハウがエリア内に豊富にありますので、助け合いとしての企業間の交流も活発になるでしょう。

日本のビジネスの中心である大丸有におけるそのような動きは、非常に大きな社会的インパクトをもたらします。とりわけ海外に向けて発信していくことは、観光面や金融面などでの日本の評価に大きな意味があるはず。この分野で各企業やビジネスパーソンのクリエイティビティが十分に発揮され、実験され、さらに新しい産業の創出にも結びついていく。それこそが、クリエイティブ・シティとしての大丸有の一つの姿ではないでしょうか。

いぐち・のりお

1956年東京都渋谷区生まれ。80年東京大学卒業後、運輸省（現国土交通省）入省。94年青山学院大学経営学部教授を経て、2008年より現職。07年から同大学社会学連携研究センター所長も兼務。専門はクリエイティブ経済論、創造都市論。学外では文化経済学会理事、NPO 渋谷・青山景観整備機構理事長、NPO 明日の神話保全継承機構理事、東京都歴史文化財団運営諮問委員会委員などを兼務。近著に「青山文化研究」（宣伝会議）、訳書に「クリエイティブ資本論」「クリエイティブ都市論」（ダイヤモンド社）などがある。



フラットな組織の効用とゆるい空間の必要性

冒頭、大丸有には均質な人が集まっているとお話ししました。第一線のビジネスパーソンは、おしなべて有能なジェネラリストです。ファシリテートに長けたジェネラリストが集まるこのエリアで、もし新しい価値を生み出そうとするならば、スペシャリストあるいはクリエイター、イノベーターを、新たに企業の内部に生み出す仕組みが必要です。

次に何をつくれればよいかはわかっている時代には、ピラミッド型の組織が有効に機能していました。いまは何をつくり提供すればよいかはわからない時代であり、ジェネラリスト集団だけでは対応できない。アイデアを次々と生み出し、その場で試行錯誤を即座に展開できるようなフラット型のスペシャリスト集団も強く求められている。生産や営業の現場をはじめ、本社業務においても、ピラミッド型組織のメリットが失われつつあります。軍隊的なものを崩して、自由にヨコにつながれるような形にすれば、それぞれの企業や部署においても創造機能を発揮しやすくなります。

その際、ハード面で大丸有に必要なものは「場所」だと思います。芝生の広場のような不特定多数が集まれる何にでも使える空間です。必ずしも屋外である必要はなく、地下街の中でもよい。大事な点は「ゆるい空間」であること。大丸有はあまりにも整然としすぎており、隙がなく敷居が高い。それを崩すような空間にする必要があります。その空間に社内でも生み出したスペシャリスト、クリエイター、イノベーター

ターが日常的に立ち寄り、会話し、何となく時間を過ごすことが奨励されるような雰囲気が出てくればいいですね。

最近の丸ビルや新丸ビルは、魅力的な店舗を増やすことで足もとを工夫しているの、だいぶよくなっていますが、全体にもっとゆるいイメージを出せればと思います。その際、企業や地権者などが気にする“管理”の部分をどこまでゆるくできるか。それが大丸有の交流・創造・発信機能の鍵となるでしょう。

都市文化における Hub 機能を

最近「クールジャパン」といって、日本の文化や食、製品などが国際的に評価され、たとえばゲームやアニメなどが外国人の支持を集めています。それらは海外から観光客を呼び込むコンテンツの一つになっていますが、大丸有は海外とのネットワークを活かしていくことが大切です。つまり日本の玄関口として外国に出していくものを選択する、あるいは入ってくるものを最初に受け止め、銀座・日本橋、渋谷・青山あるいは地方につなぐ、といった機能を担うことが期待されます。言わば、都市文化における Hub & Spoke の Hub の役割です。東京はモザイク状の都市ですから、「ゆるい空間＝解放区」をチャンネルにしてそれぞれの地区と連携できれば、東京の玄関口としての大丸有ならではの存在価値が出てくると思います。数多くのユニークでクリエイティブな魅力を持つ地区からなる東京の中心で、その玄関口となり得る大丸有の機能的・地理的位置を改めて自覚し、その役割をしっかりと果たしていけることを強く希望します。



サラリーマンが再び カッコよくなれるまでに

生瀬勝久 俳優

NHK 総合で、シュールなコントで人気の「サラリーマン NEO」。デフォルメされたサラリーマンを見事に演じる生瀬勝久さんの思い描く大丸有は、

仕事以外の振り幅が 大きくなれば 活力が生まれる！

6シーズン目を迎えた「サラリーマン NEO」のキャッチコピーは「サラリーマンは、カッコいい」です。ところが巷では、男性サラリーマンは格好よくない、疲れている、そんな声が聞こえてきます。僕はサラリーマンではないのでその内情はわかりませんが、舞台をやっていると感じるがあります。それは、お客さまは女性が圧倒的に多く、サラリーマンらしい方をほとんど見かけないこと。サラリーマン向けの作品が少ないのもあるでしょうが、おそらく、舞台や演劇を楽しむ、鑑賞する余裕がないんだろうなと思います。女性は楽しむことにどん欲ですが、男性ももっと人生を豊かにするため、堂々と「楽しむ気概」を持って、アクションすべきでしょう。

いまのサラリーマンは、いろんなことを省いていると感じます。おしゃれとか、新橋や神田でお酒を飲んで氣勢をあげるとか、週末に外出がてら、競馬に興じるといった仕事の後のガス抜きさえも省いてしまっているように感じます。勤務時間の一生懸命さだけでなく、勤務時間外の行動を盛り上げるようなものが、何かできないかと思えます。

たとえば海外のカジノのような場所。ギャンブルに、劇場などのエンタテインメントやレストラン、バーもそろっています。実現するのは簡単ではないでしょうが、ただ飲食だけの場所ではなくて、サラリーマンを惹きつけるアミューズメントとセットになったものをつくる。それによって活力が生まれ、

公私両面にわたって「カッコいい」につながれば、素敵だと思いますよ。

無茶なアイディアの中に ヒントがある

人が生き活きと働ける、楽しめるまちにするには、どうすればいいのか。それには、常識をとっぴらって、ありえない理想を考えてみることで。僕は沖縄の「美ら海水族館」を持ってきたい。あれだけのものを東京や大丸有につくったら凄くないですか。ジンベイザメたちが泳ぐ「黒潮の海」があったら、理屈じゃなく圧倒的に楽しい。

たとえば皇居のお濠を徹底的にキレイにして、清流の中で泳ぐ魚たちを横から、下から眺められないでしょうか。誰もが無理だと言うでしょう。でも本当に無理なのか。NHK大河ドラマ「江」で、利休が『無理というのは人の心が作り出すものじゃないですか』と語ります。無茶なことにチャレンジすることは、夢があるから、見る人が感動するのだと思います。

僕のような役者にまちづくりに関して意見を聞くのは、おそらく初めてで、普通はしない。それをしてみるという時点で、新しいヒントを一生懸命探そうとしている姿勢が感じられます。せっかくなので勝手なことを言いますと、たとえば、クルマや電車、お酒が好きな男性のための「男まち」、おしゃれやグルメが好きな女性のための「女まち」をつくるというのはどうでしょう。

このような、常識では却下されるようなアイディアは、いろんな人の意見を聞くことから生まれる。そして、意

なませ・かつひさ

1960年兵庫県西宮市生まれ。同志社大学文学部社会学科産業関係学専攻卒業。所属事務所はキューブ。学生時代に劇団に参加し、座長を務めた。退団後はドラマ、映画、舞台と幅広く活躍。主な出演作品は「トリック」「ごくせん」「警部補矢部健三」など。現在、NHK「サラリーマン NEO Season 6」に出演中。主演する映画「劇場版 サラリーマン NEO」が11月3日より公開予定。このほか、出演映画「カイジ2」「はやぶさ」も秋より公開を控える。



見を選ぶ側もバラエティが必要です。決まったメンバーで選んでいては似たような結論になり、ブレイクスルーは生まれません。就業者に公募して、普段なら選ばれないような人に思い切って任せてみればいいんですよ。

オンではチャレンジ、 オフでも楽しめる大丸有に

企業側でもサラリーマンをもっと元気にする取り組みが必要です。たとえば仕事の目的が会社や自分のためだけでなく、環境や地域、あるいは今回の震災復興に寄与できると感じられることは重要です。僕もいま演劇をやっているのかと疑問に感じることもありますが、公演売上の何%かが被災地支援に回ると聞くと、よし頑張ろうという気持ちになります。貢献できる人が見えると、働く喜びやモチベーションになるんです。

あるいは会社の海外保養地に必ず1週間行けるとか、社食はすべて無料で、必ず有名ラーメン店のメニューがあるとかでもいい。社員はそんな単純なことで一日頑張れる。それなら企業はやらない手はないですよ。

先にお話ししたとおり、仕事が終わった後をどう楽しめるかは「カッコいい」に大いに関係しています。ですから、新橋や六本木、赤坂にくり出すのも悪くありませんが、このエリア内でオフを楽しめる場がほしいです。

昔、京都にいたとき、「北白川バッティングセンター」によく行きました。そこは野球だけでなく卓球に麻雀や囲碁将棋もできるし、近隣に食事どころも多い。とりあえずそこに行ってから何をするか考える場所

した。大丸有にもそんなものがあるといいですね。皇居ランニングの拠点となるジムに行くとプールやゴルフ、カラオケ、飲み食いしながらいろんな人が自由に交流できる。お店はどんどん競わせて、人気順で入れ替えをしていく。結果で評価するところがカギですね。

役者の立場から言うと、演劇を楽しめる場もほしい。国際フォーラムはありますが、渋谷や下北沢のような小演劇を楽しめる空間がない。そして芝居が終わった後は、芝居談義や打ち上げができる飲み屋も必要です。そんな場があれば、芝居好きなサラリーマンも集まるし、サラリーマン向けの芝居も増えてくるかもしれない。音楽好きな人にはライブハウスですね。サラリーマンを対象にしたライブハウスがあってもいい。吉田拓郎やイーグルスのコピーバンドが毎日演奏していたら、ファンコミュニティも自然に広がるでしょう。

ドキドキ感は生活に絶対に必要だと思うんですよ。そこには意外性も欠かせない。僕はいま東京駅のラーメンストリートに興味があります。こんなふうに自分や周囲の琴線に触れるものを探していけば、きっとヒントが見つかると思います。

大丸有は日本経済を引っ張ってきました。ここにある企業のトップは案外、無茶した人なんじゃないか。できないと諦めずにチャレンジしてきたんじゃないか。大丸有はこれからもチャレンジの舞台であってほしいし、いちサラリーマンにとっても、それぞれのライフスタイルを楽しめるエリアとなって、日本全体を元気にしてもらいたいと思います。

トップコミットメント

「ハード」と「ソフト」と「コミュニティ」の 組み合わせを強みに “環境ショーケース大丸有”の発信は続く

あいばなおと
合場直人 大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会 幹事長

「企業の顔が見える」 コミュニティで 被災地支援と地域連携を加速

この度の東日本大震災により被災された皆さまには心よりお見舞い申しあげるとともに、皆さまの安全と一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

*

今回の大震災では幅広い地域での想定外の被害を目の当たりにし、私たち都市の活動は地方によって支えられていることを、改めて強く認識しました。また、甚大な被害をコミュニティの中で、コミュニティを越えて皆さんが乗り越えようと努力する姿に、深い感銘を受けています。

コミュニティの基盤は、人と人が顔を知っていること。大丸有コミュニティは、企業同士が集まり、お互いの顔が見えている点が際立った特長です。この地域には企業単体だけでなく、エリア運営を担う組織があり、社会的意義の大きいムーブメントを起こせる環境が備わっています。今後も個人と企業の両面からうまくコミュニティを成長させ、互いに協力し合ってまちづくりを進めていきたいと考えています。

実証結果で 環境負荷低減効果を実感

2010年は、これまでの地道な環境まちづくりの活動成果が表れた1年となりました。10年4月に導入された

新丸ビルの「生グリーン電力」は、想定通りビル全体の使用エネルギーのほぼ2/3を賄うことができました。普及には課題が多いものの、ビル1棟の全電力を自然エネルギーで対応することができた意義は大きい。これを加速させることは、都市と地方の関係性強化につながりますし、自然エネルギーと蓄電池を組み合わせた新たな電力供給マネジメントの手法を世に問うた意義は小さくありません。

年々進歩する環境技術や新たなマネジメント手法の導入例はほかにもあります。たとえば09年秋にエコツェリアに実装された「次世代低炭素型技術実証オフィス」は、「働く場」の知的生産性の向上と省エネルギーの両立を目指した新たな試みです。導入以降、主要技術である知的照明や輻射空調を広く対外的に訴求しましたが、それに呼応するごとくエリア内外で試験導入が広まりました（三菱電機、森ビル、三菱地所等）。1年間の実証データを集計したところ、30%の省エネ実現、という実験結果も得られました。

最近の新しいビルは、単位面積当たりのエネルギー効率が90年比で大きく向上しています。高効率照明やLow-Eガラスの導入など最新の環境技術導入がその要因ですが、今後はユーザーのワークスタイルをより省エネに向わせる「見える化」が大切になると考えています。現状を把握し、省エネの取り組みと結果の関係が見えることで、さらなるアクションを生み出すからです。得られた知見を企業同士で交流させ、技術の進歩、アクション実施

のスピードをぜひとも速めたい。スマートコミュニティの検討でも行いましたが、先端技術の前倒しを含めいかに2050年に70%を超える省エネ性能の向上を図れるか、議論は尽きません。

コミュニティでの 交流を通じて ポテンシャルを発揮

ハード面とあわせ、ソフト面の充実も進んでいます。「丸の内朝大学」では、ソーシャルビジネスや農業、食、健康といった講座や、卒業生を含めた「朝大学コミュニティ」を活用した被災地支援のプロジェクトを実施するなど、企業の壁を超えた情報交換とアクションが生まれています。「打ち水プロジェクト」も、参加企業の増加（144団体）や、仲通りの店舗による日々の打ち水実施も定着してきました。そのほかにも環境への取り組みに熱心な企業の環境活動を1ページで訴求する大丸有環境カタログ「エコのまど」も2刊目を発行できました。私たちの想いは、エリアの4000事業者に、このような活動へぜひとも参画してほしい、ということです。企業や就業者の連携によるコミュニティアクションを、顔の見える関係を基盤に広げたい。周りの企業のよい取り組みを知り、自社の事業に反映させたり協業を創出したいのです。そうすれば環境まちづくりに向けて全体がレベルを上げていけます。逆にそうした積み重ねがあつてはじめて日本一、世界一の“環境ショーケース大丸有”が実現できるのです。



環境と社会、強い経済が 併存するショーケースに

震災を契機に、各企業ではBCP（事業継続計画）の見直しが進んでいます。大丸有ではCCP（コミュニティ持続性計画）の検討をしたいと考えています。災害時の安全性や食料・水、エネルギーの確保などとともに企業コミュニティが災害時にどう機能すべきか、この機会に災害に強いまちづくりと企業コミュニティの関係を再構築する必要があります。

災害時の対応には、自助、公助そして共助があります。大丸有では、すでに各企業が自助でしっかりとした備えを進めています。そして各企業の顔と活動内容がお互いに見えれば、共助の力も増していきます。震災直後の大丸有エリアでは、帰宅困難者にビルを開放したり、毛布やシートの提供、飲食店による炊き出し等が数多く見受けられました。大丸有は、ハードの安全性の追求とともに、コミュニティによる

リレーションがある。そのようにして日本で一番安全なエリアを追求していきたいと思います。

また今回の震災をうけ、大丸有でもエネルギーに関して多くの検討課題が顕在化しました。地域連携を前提とした自然エネルギー活用による「電気の多様化」は、地区の低炭素化のテーマの中ですでに検討がなされていますが、防災では発電機や電池等の活用を想定した「電源の多層化」が議論になります。太陽光とクルマのバッテリーを組み合わせたスマートシティが防災の視点で議論されていますが、低炭素化と防災は親和性があるのは明らかです。事業性等課題は山積みですが、深掘りしていくべきテーマだと認識しています。

大丸有では、地権者、テナント、インフラ事業者、行政、就業者、来街者といったあらゆるステークホルダーとともに、「大丸有 環境ビジョン」を共有してアクションを加速させる必要があります。そのため、環境ポータルサイト「エコツェリアWEB」や「丸

の内地球環境新聞」で、地区内企業や団体の先進的な活動を紹介したり、有識者やオピニオンリーダーの提言を継続的に掲載するなどエリア内外に向けた発信力を高めていきます。

環境対応は、我慢を強いることではありません。快適性や知的生産性の実証にトライしたのはそのためですが、そうした実績を、成長力、競争力の源泉にするとともに、環境・社会・経済のトリプルボトムラインがしっかりと存立するコミュニティづくりにつなげたい。最先端のハードとソフト、意識の高い人が集う活発なコミュニティが大丸有の財産であり、この組み合わせをさらに活用して相乗効果を生めば、必ず日本の元気づくりに寄与できるものと思います。日本全国、そして海外からもたくさんの人や企業を呼び込み、共感者をもっともっと増やし、私たちのステークホルダーとも交流させ、それがまた新たな効果を生み出す、そうしたスパイラルアップが常に行われる「場」が、この大丸有なのです。

2010 年度のCSRアクション

「大丸有環境ビジョン」の実現に向けて、
私たちは大丸有に関わる人びとと連携・協力しながら、
さまざまな取り組みを行っています。



地域連携 P.18

コミュニティアクション P.19

生物多様性 P.20

グリーンビルディング P.21

CSR コミュニティ P.23

歴史・文化・観光 P.24

快適なまち P.25

安心・安全 P.26

環境技術 P.22

地域連携

生グリーン電力／食育丸の内／丸の内ハウス地域フェア／空と土プロジェクト／「都市の食」ビジョン

交流活動や、地域資源の活用、エネルギーの連携など、大丸有と地域がつながる取り組みが増えました。

エネルギーでは、2010年4月より新丸の内ビルで使用するすべての電力を、青森や北海道の風力、水力等の自然エネルギーで発電した「生グリーン電力」にしています。ビル全体のCO₂排出の約3分の2を削減することとなりました。

この試みを取り入れるビルが増えると、地域に自然エネルギーの設備や管理業務が創出され、環境経済の推進と低炭素化の両立が進みます。

地域のいい食材、生産者と触れる機会として、丸ビルや東京交通会館、東京国際フォーラムなどエリア各所でマルシェが開催されました。一般の来街者や就業者だけでなく、レストランのシェフやスタッフが購入に訪れ、その後の取引が始まるのもこのエリアの特徴です。

日本各地だけでなく、東京都の食材を見直そうと、都産都消の取り組みも行われました。東京の野菜生産者のマルシェへの出店や、「食育丸の内」のランチ企画での、東京食材の利用、丸の内シェフズクラブとの共

同による、都産食材の試食会や、生産者視察ツアーも実施されました。

またエリアの飲食店舗を舞台にした、地域の食と文化に触れる活動も盛んです。国産伝統野菜（京都・会津・江戸）を活用したディナーイベントや、2011年2月には丸の内シェフズクラブの6人のシェフが福島の食材とコラボした福島県フェアも開かれました。「丸の内ハウス」（新丸ビル7F）では、地域の食材を店舗がメニュー展開する企画が、富山、山梨、三重を題材に行われ、さながら東京「県人会」の光景も各所で見られました。

三菱地所グループが進める「空と土プロジェクト」では、山梨県を舞台に社員限定のツアーのほか、エリア就業者や一般の方々を対象に、味噌づくりや酒米づくりも催され、収穫した酒米でオリジナルの日本酒、純米酒「丸の内」（醸造元：萬屋醸造店）ができあがりました。

エコツツェリアでは、食の研究者、シェフ・飲食店経営者、流通、企業の社員食堂担当者等が集まり、「都市の食」ビジョンを検討し、都市と生産地のつながり方について議論が続けられています。



青森県にある風力発電所



丸の内マルシェ



「空と土プロジェクト」の稲刈り

コミュニティアクション

丸の内朝大学／打ち水プロジェクト／エコキッズ探検隊／エコ結び

環境まちづくりを推進する、さまざまなコミュニティによるアクションが展開されました。

丸の内朝大学では、ランニング、ヨガなどの健康増進、イクメン、マネー等のライフスタイル、能や祭り、日本の生活美といった風習文化に加え、地域プロデュース、農業、温泉といった、地域活性につながる独自コンテンツによる講座が開催され、春・夏・秋とのべ1,875人が受講しました。夜型から朝型へのライフスタイルのシフトによる消費電力の軽減や、通勤のピークシフトにも寄与しています。

また環境学部の講座から誕生した環境コミュニティアクションでは、ハイタッチ隊、東京キャンプ、オトナ美化委員などがエリア内外で活動を進めています。さらに、朝大学に通う受講生を応援するため、エリアの飲食店舗が「学食」として連携しています。

夏の環境アクションとして、「打ち水プロジェクト」が実施されました。リニューアルされた行幸通りや有楽町イトシア前広場、三井物産カルガモ池前広場、東京サ

ンケイビルメトロスクエア、東京国際フォーラム地上広場で、のべ2,800人が参加し、一斉に水を打ち、まちの気温を下げる取り組みを実施。夏の間は丸の内仲通りの各ショップでも随時打ち水を行い、来街者や就業者がまち歩きしやすい環境をつくり出しました。千代田区の打ち水大作戦や、大阪・西梅田の打ち水プロジェクトとも連携しています。

「エコキッズ探検隊」では、工作、生き物、音楽、食といったテーマでのワークショップや、まち探検ツアーをエリア内外の企業・団体が開催しました。のべ989人が参加し、体感できる環境教育と夏休みの自由研究に参考となるプログラムが両方体験できるとして好評を博しました。

Suica、PASMOを使って加盟店で食事や買い物をすると環境基金が自動的にたまっていくエコ結び（大丸有エコポイント）も、加盟店が185店舗に広がり、「千代田さくら基金」や「信濃川ふるさとの森づくり」など、エリア内外の緑づくりに使われています。



丸の内朝大学に通う人びと



打ち水プロジェクト



エコキッズ探検隊

グリーンビルディング

トップレベル事業所／サステナブル建築賞／エコツェリア次世代低炭素型技術実証オフィス／知的照明／輻射空調／グリーンタウンマネジメント検討会

東京都による環境確保条例に基づく「温室効果ガス排出総量削減義務と排出量取引制度」において、大丸有エリアでは7ヵ所が「トップレベル事業所」「準トップレベル事業所」に選ばれました(2007年以降の竣工ビルは対象外)。地球温暖化対策が特に優れていると認定され、削減義務率の緩和が受けられます。

※トップレベル：サピアタワー（JR東日本）、三菱商事ビル（三菱商事）、新大手町ビル、丸ビル（三菱地所）
準トップレベル：丸の内トラストタワー（森トラスト）、東京ビル（三菱地所）、丸の内熱供給 丸の内一丁目・二丁目センター（丸の内熱供給）

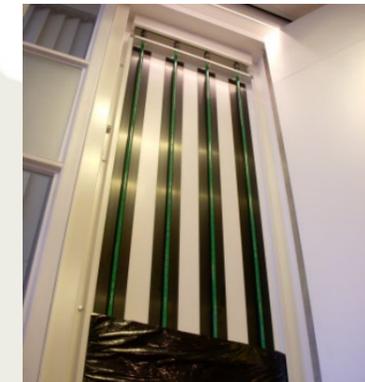
また新丸ビルが、省エネ手法や既存ビルの廃材の再利用等が総合的に評価され、第3回サステナブル建築賞（主催：建築環境・省エネルギー機構）の国土交通大臣賞を受賞しました。その新丸ビルにあるエコツェリアでは、2009年10月より、「次世代低炭素型技術実証オフィス」での実験を開始。ポイントは2つ。知的照明システムにより、オフィス全体を共通の明るさにするこれ

までの照明から、個人ごとに必要な照明が設定できるようになっています。不在者の席の照明を消せるとともに、実際に就業者が使う照度が平均300ルクス程度となり、LED照明導入とあわせて、蛍光灯を使った通常のオフィスと比べて、省エネが可能になっています。また、エアコンのモーター動力を減らすため、冷水・温水を通した熱交換ホースを天井や壁面に張り巡らせた輻射空調を導入しました。送風口が冷えすぎる等の不快感がなく、オフィス全体を効率的に冷暖房しています。照明・空調あわせて通常オフィスに比べ30%程度省エネという実験結果が出ています。

さらに、ビルのエネルギー活用を面的に効率的に進めるスマートコミュニティの検討も進みました。エネルギーに関する学識や、エリアのビルオーナー等により「グリーンタウンマネジメント検討会」が開催され、大丸有エリアでの効率的なエネルギー利用や、新丸ビルに導入済みの「生グリーン電力」の面的展開について、意見交換や分析が進みました。



新丸ビル



輻射空調パネル（エコツェリア）



知的照明システム（エコツェリア）

生物多様性

丸の内さえずり館／ソトコト×丸の内ハウス／信濃川ふるさとの森づくり／エコキッズ探検隊／地球大学アドバンス

2010年は、「国際生物多様性」年でもあり、皇居に隣接した大丸有では、生物多様性に関する活動も積極的に取り組んでいます。新有楽町ビル1Fには、三菱地所が社会貢献の一環として設置・運営している「自然環境学習ひろば 丸の内さえずり館」があります。NPO、NGO等自然保護団体との共同企画により、森林・海洋の生きものや環境をテーマに、パネル展を8回、草花、昆虫や鳥、天体などさまざまな自然観察をするフィールドイベントを61回開催し、のべ約1,600人が参加しました。

新丸ビル7F「丸の内ハウス」では、5月～6月にかけて月刊誌「ソトコト」と共同で、「食でつながる人と環境」として、森林や海洋の恵みに関する写真展、ライブラリー、トークショー等が展開されました。あわせて、森や海の恵みを楽しめるメニューが各店舗から提供され、食事と学びのコラボレーションが行われました。

大丸有エコポイント「エコ結び」では、JR東日本が行う「信濃川ふるさとの森づくり」に協力し、エコ

結び利用者の参加呼びかけや、基金による苗木の提供を実施し、宮脇昭氏（横浜国立大学名誉教授）の指導のもと、新潟・津南町の会場で植樹が行われました。基金は千代田区のさくらの維持・管理や、大丸有エリアの緑を増やす活動等に使われていきます。

夏の「エコキッズ探検隊」では、「森のエコキッズを探そう!～自然観察と『いきものカルタ』遊び」（実施：ニコン）や「ミニ屋上庭園をつくろう!」（実施：日比谷花壇グループ）で、子どもたちが体験しながら都市での生き物の実態や大切さを学ぶプログラムを提供しました。

地球大学アドバンスでは、皇居エリアの生態系調査に参加した西海功氏（国立科学博物館）や清野聡子氏（九州大学）を招き、大丸有周辺の生態系の特徴や、皇居内の生物多様性保護への取り組み、東京湾の生態系について、レクチャーが実施されました。また丸の内地球市民ギャラリー（丸の内オアゾ前地下通路）では、生物多様性に関する、観測衛星「だいち」による画像やムービーの展示が行われました。



エコ結び「信濃川ふるさとの森づくり」協力



エコキッズ探検隊「ミニ屋上庭園をつくろう!」（実施：日比谷花壇グループ）



自然環境情報ひろば 丸の内さえずり館

環境技術

太陽光発電（JR東日本東京駅・三井物産本店ビル）／ゼロタクシー／行幸通り竣工／UIT 技術発表会／ハリの風大賞／環境技術視察研究会

エリアの環境推進のため、ビル単体にとどまらず、さまざまな環境技術に関わる活動が行われました。

JR東日本では、東京駅東海道線の9・10番線ホームに太陽光発電システムを設置、3,846㎡、453kWと、大丸有でも最大規模の導入です。三井物産本店ビル屋上（高さ約100m）でも設置されました。また、エリア内に広がってきた電気自動車用充電器を活用するため、i-MiEVを使用したゼロタクシーの運用が、2010年3月から始まっています（運営：日の丸リムジン）

東京都が整備して4月に竣工した行幸通りは、東京都道路局と三菱地所が協力し、道路面に保水性舗装を導入するとともに、周辺ビルで使われた水を処理した「中水」を散水して、路面の温度上昇抑制に取り組んでいます。この場所を活用した「打ち水プロジェクト」も実施されました。

また、都市インフラ技術の開発・啓発・普及そして活用を目指して活動するアーバンインフラテクノロジー推進会議による、技術研究発表会が丸ビルで、企業や自治

体による研究成果の交流展示会が行幸地下ギャラリーで行われ、環境・エネルギー、情報・交通、まちづくり、低炭素のテーマで展開されました。

エコツェリアの丸の内地球環境倶楽部WGで、環境共生のものづくりをテーマに、「ハリの風大賞」として、輻射空調が普及した際に求められるパーソナルファンのデザインコンペ（審査委員長：川瀬貴晴千葉大学教授）が実施されました。製品デザイン部門の最優秀賞は「Aeroof」（川島優氏+鷲尾和俊氏）が、試作品部門の審査員特別賞を「ナノイー加湿発生器」（パナソニック電工）が受賞しました。

さらに、大丸有再開協議会による環境まちづくりの視察研究会（広島市・北九州市）や、エコツェリア協会の会員企業による環境への取り組み視察会（東京スカイツリー工事現場、首都高速大橋ジャンクションの環境技術・緑化推進）等、企業や自治体の先進事例の情報共有なども進められました。



ゼロタクシー



太陽光発電システム（JR東日本東京駅）



行幸通りでの散水

CSR コミュニティ

打ち水プロジェクト／大丸有協議会／リガーレ／地球大学アドバンス／丸の内地球環境倶楽部WG

大丸有のCSRは、「C」＝コミュニティの持続可能性を追求しています。そのため、企業の連携、就業者や来街者、テナント店舗と一般の方々など、まちに関わるさまざまな人びとによるコミュニティが活動しています。

夏の風物詩ともなった「打ち水プロジェクト」では、「行幸通り 浴衣 de 打ち水」で打ち水を実施したほか、ウェザーニューズと連携してどのくらい体感温度が変化したかを集計する「打ち水感測」も行われました。このほか、大丸有の各所で、のべ144団体、2,800人の周辺企業の就業者、テナント店舗、一般の来街者が参加し、共同して涼と交流をつくりだしました。また、大丸有再開協議会による環境向上の研究会や、リガーレ（NPO大丸有エリアマネジメント協会）による、公園の清掃や花・球根植え等の活動も年間を通して行われました。

環境先進企業の担当者が集うコミュニティとして、地球環境セミナー「地球大学アドバンス」が1回開かれました。「東京シフト」と題して、地球環境問題を東京でどう取り組むかを、生物多様性、エネルギー、森林、

高齢化、食、交通等のテーマで、専門家によるレクチャーと、就業者等によるディスカッションが行われました。

丸の内地球環境倶楽部の研究会（ワーキンググループ・WG）では、4テーマでの活動がありました。企業の環境・CSR活動をより効果的に訴求する「環境コミュニケーション」では、環境カタログ「エコのまど」が制作されました。食において都市はどうあるべきかを専門家と実務者で語る「都市の食」では、「都市の食」ビジョン、ガイドラインの策定、エリアのレストラン、社員食堂の実際のメニューのフードマイレージ試算や、店舗の共同調達による物流面での低炭素化の調査が行われました。

また「健康なオフィス」「ものづくり」では、快適なオフィス空間を構成する要素や省エネと快適性の関連性分析、省エネ型輻射空調をより快適に活用するパーソナルファンのデザインコンペ「ハリの風大賞」などが実施され、環境対応と快適性を両立させる研究が進みました。



地球大学アドバンス



健康なオフィスWG 見学会



環境コミュニケーションWG ワークショップ

歴史・文化・観光

行幸通り／東京駅復原工事／ラ・フォル・ジュルネ／三菱一号館美術館／
出光美術館／藝大アーツ in 東京丸の内／常盤橋公園 ほか

東京駅と皇居を結ぶ「行幸通り」が4月に竣工しました（事業主：東京都）。リニューアルにあわせて歩道兼馬車道には保水性舗装タイルが採用されました。また歩道側とあわせると4列になるイチヨウ並木の整備や、中水による散水も行われ、風情ある空間づくりとヒートアイランド対策が進んでいます。行幸通りの一端とつながる東京駅は、リニューアル工事が進んでいます。国の重要文化財である丸の内駅舎は、太平洋戦争の戦災を受けており、消失した3階部分やドーム型屋根等の復原工事が2007年5月より行われています（竣工2011年度末予定）。

音楽面では、GW期間中に「ショパンの宇宙」をテーマにラ・フォル・ジュルネが開催され、来場者は80万人を超えました。大丸有エリアの就業者を中心に集まった「丸の内合唱団」は、ラ・フォル・ジュルネ参加等エリア内外で活動し、10月に第1回定期演奏会が開催されました。

美術分野では、4月に三菱一号館美術館がグランドオープン、『マネとモダン・パリ』展を皮切りに、新し

いアート拠点としての楽しみを提供しています。出光美術館では『仙崖』展、『琳派芸術』展など、日本美術を中心に展覧会が開かれました。

また、秋には東京藝術大学と三菱地所の共催による「藝大アーツ in 東京丸の内」が丸ビルで展開され、コンサート、オペラ、墨彩画や切り絵のほか、大丸有の就業者によるピアノコンサートも行われました。さらに、歴史やアートを切り口にまち歩きを行う「丸の内ウォークガイド」も年間を通じて実施されました。

日本文化に親しむ活動として、京みやこサロン in 丸の内（主催：京都館、リガール）や、浴衣で集う「浴衣 de 打ち水」、さらに、丸の内朝大学や京あるき in 東京（主催：京都市、京都商工会議所ほか）などで、日本文化・京都文化に触れるセミナーやワークショップも展開されました。

江戸城門の一つであった常盤橋門の石垣の一部が残る常盤橋公園周囲では、春の桜まつりや花壇への球根植え等の活動が、エリアの就業者・来街者等により実施されました。



行幸通り



ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」
2010 展示ホールキオスクステージ ©久保靖夫



三菱一号館美術館

快適なまち

丸の内フラワーウィークス／丸の内仲通りガーデニングショー／千代田さくらまつり／常盤橋公園／
キッズプログラム／スカイバス東京／丸の内ウォークガイド／地産地消／丸の内イルミネーション

大丸有は、働く人たちが働くために快適に過ごせる環境づくりや、まちを訪れる来街者が心地よく大丸有を楽しめるまちづくりを進めています。

まちに緑や花があふれる企画としては、4月に「都市と人と自然をつなぐ」をテーマに全国の花々が集まり藤棚設置などを行った「丸の内フラワーウィークス」が開催されました。また10月には会話が弾む緑空間を主眼に、「丸の内仲通りガーデニングショー」が開かれ、仲通りには公募審査で選ばれた15点の作品が並びました。

春に開催された「千代田さくらまつり」に合わせて、丸の内シャトルも大丸有エリアから神田・秋葉原エリアまで延長運行をしました。同時期には常盤橋公園で、LED照明によるライトアップも行われました。この公園を中心に活動する常盤橋フォーラムが音頭を取り、公園の花の苗や球根植え、日本橋川の清掃なども実施され、大丸有の就業者もボランティア参加しています。

親子向けのプログラムも充実しています。ゴールデンウィークに開催された「ウェルカムキッズ in 丸の内」では、ふだんはあまり子どもが入店する機会のない和洋中7つのレストランで食事マナーや食材を学ぶ企画が行

われました。

夏休み期間中には恒例の「エコキッズ探検隊」や、東京国際フォーラムでの「キッズフェスタ」が開かれ、100以上のプログラムに多数の子どもたちが参加し、あわせて子どもたちによる打ち水も実施され、ヒートアイランド対策にも一役買っています。

まちを見て回る活動として、丸の内シャトル運行（乗車人数：約56万人）のほか、皇居・国家議事堂・銀座等をバス上から楽しむスカイバス東京（運営：日の丸リムジン）運行や、歴史・浪漫・アートをテーマにしたまち歩き「丸の内ウォークガイド」（運営：リガール）も定期的に行われ、多角的な大丸有の魅力発見にもつながっています。

「都心での地産地消」の視点で、6月にオープンしたパソナグループによる「アーバンファーム」では稲刈り式が行われました。7月にはサンドイッチチェーン「サブウェイ」丸ビル店で野菜ラボがオープンし、野菜の育成や収穫なども行われました。

冬には、仲通りの街路樹が光のアーケードとなる「丸の内イルミネーション」で、すべてLEDを使った演出も行われました。



「アーバンファーム」稲刈り式（パソナグループ）



丸の内仲通りガーデニングショー



キッズフェスタ（東京国際フォーラム）



安心・安全

総合防災案内板／東京駅周辺防災隣組／避難訓練／DCP 連携会議／
EV 防災・防犯パトロール／水害対策セミナー

大丸有のある千代田区は、建物の不燃化が進み、延焼火災の危険性が少ないため、全域が「地区内残留地区」に指定されています。また、帰宅困難者支援場所として、近隣では皇居外苑、日比谷公園、皇居東御苑、北の丸公園が指定されています。このような情報も含めて、エリア内に総合防災案内板が7ヵ所設置されています。

自治体と連携する地域協力会として、東京駅周辺防災隣組が2004年に設立され、大丸有を舞台にさまざまな活動に取り組んでいます。毎年開催されている帰宅困難者避難訓練は、1月に行幸地下通路で、エリアの就業者300人により実施されました。また、地域の持続可能性を追求する「DCP」について取り組みを情報交換するため、12月に「業務市街地DCP担当連携会議」が開催され、市街地拠点として東京駅のほか、飯田橋駅、四ッ谷駅、新宿駅、渋谷駅、汐留駅、横浜駅、名古屋駅から、地域協力会やまちづくり団体、地元大学などが参画し、これまでの防災計画で見落とされてきた視点等に関する共有化が進みました。

EV（電気自動車）を活用し、防災隣組による防災・防犯パトロールも行っています。また、神田川・日本橋川・隅田川が大雨等により増水し、水があふれた場合に浸水が発生することに備え、まちづくりや災害対策等の専門家を招いての大規模水害対策リレーセミナーも実施されました。

3月11日の東日本大地震の際には、帰宅困難による滞留者は約2,000人（防災隣組による推計）あり、毛布の配布などが行われました。また、エリアのビルが自主的に避難の方を受け入れ、レストラン等による炊き出しなども各所で行われました。

千代田区により、区内の鉄道駅（JR、東京メトロ等）に携帯トイレを備蓄される計画も発表され、企業や避難所による水・食料の備蓄に加えて、備蓄品の充実も進んでいます。

避難所案内や洪水ハザードマップは、千代田区防災ホームページ（<http://www.bousai.city.chiyoda.lg.jp/disaster/>）で入手できます。

大丸有では、こんなCSRアクションも



都市の食WG 東京産食材の試食会



丸の内ウォークガイド



アーバンインフラテクノロジー推進会議の発表会



首都高速大橋ジャンクション視察会



常盤橋公園の花植え



ものづくりWG 「ハリの風大賞」表彰式



大規模水害対策セミナー



丸の内イルミネーション2010



エコキッズ探検隊 「Discovery in Marunouchi 2010」 JAXA 見学



総合防災案内板



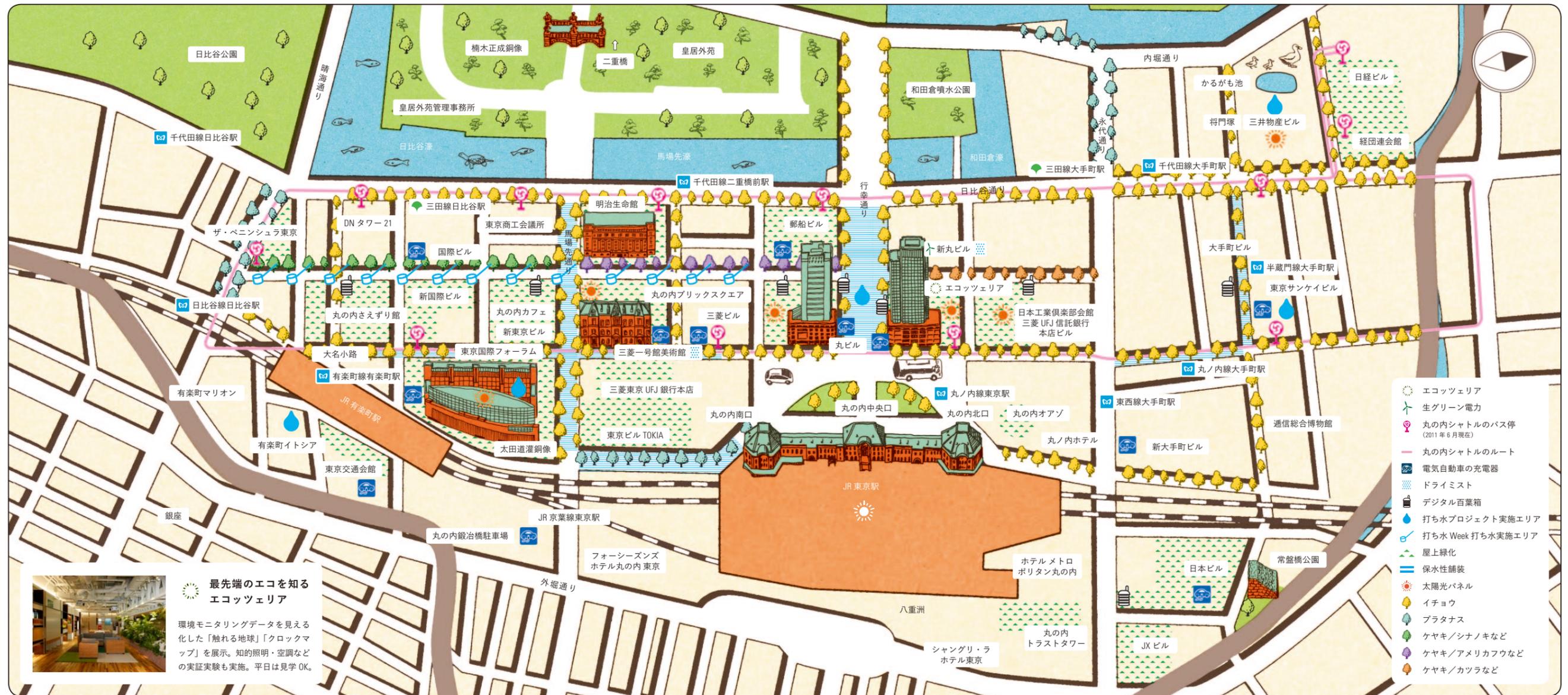
避難訓練（行幸地下通路）



EVを活用した防犯パトロール

CSR Action Map

大丸有では、エリアでさまざまな CSR アクションを行っています。それらを、地図形式で紹介します。



過去から未来まで旅ができる「クロックマップ」

過去から未来まで旅ができる、触れる地図。時計を回して歴史、文化、環境を巡るバーチャルエコツアーへ。エコツェリアで展示中。



新丸ビルは電気すべてが生グリーン電力

東京駅前の新丸ビルは、再生可能エネルギー（風力・水力などによる発電）の託送により、すべての電力を賄っています。



ぞくぞく増加中。太陽光発電

太陽光パネルによる発電がどんどん増えています。2010年度新設の東京駅東海道線ホームでは453kWを発電。年間101tのCO₂を削減。



エリアを冷やす 打ち水プロジェクト

まち全体の打ち水で気温を下げ、ヒートアイランド現象を緩和。行幸通りなどでの打ち水イベントのほか、7～8月は仲通りのショップも実施。



電気自動車のゼロタクシー

電気自動車 i-MiEV のタクシーが2台走っています。料金は一般のタクシーと同じ。初乗り料金で電気自動車を体験してみても。



電気で走る丸の内シャトル

大手町・丸の内・有楽町を結ぶ無料巡回バス「丸の内シャトル」。低公害・低騒音・低床で人と環境に優しい「EVバス」は外観もキュート。



効果の「見える化」！ デジタル百葉箱

まちの体調管理に「デジタル百葉箱」を設置。気温・湿度、風向・風速、降水量のデータはエコツェリアにてリアルタイムで見られます。



屋上緑化／壁面緑化

建築物の断熱性を高め、大気汚染物質の吸収・吸着の効果も期待できる屋上緑化。大丸有でも多くのビルでとり入れられています。



打ち水効果のある保水性舗装

車道や歩道に保水性の高い路盤材を使用。雨の日は水たまりがでにくく、晴れの日は蓄えた水が気化して、まちの気温上昇を抑えます。



真夏に体感温度を下げるドライミスト

細かい霧で素早く蒸発し、浴びても濡れない「ドライミスト」。設定気温・湿度を超えると自動で噴霧。水の気化熱吸収でまちをクールに。



大丸有で会えるどうぶつや植物

皇居を隣にする大丸有エリアでは、ビル街でも植物49種、昆虫29種、野鳥12種とさまざまな生きものたちを見ることができます。



いろいろな木々が育っています

ケヤキ、カツラ、トウカエデ、ユリノキ、アメリカフウ、シナノキ、コブシ、プラタナスなど。街路樹の緑で目をやすめ、木陰でつろぎを。

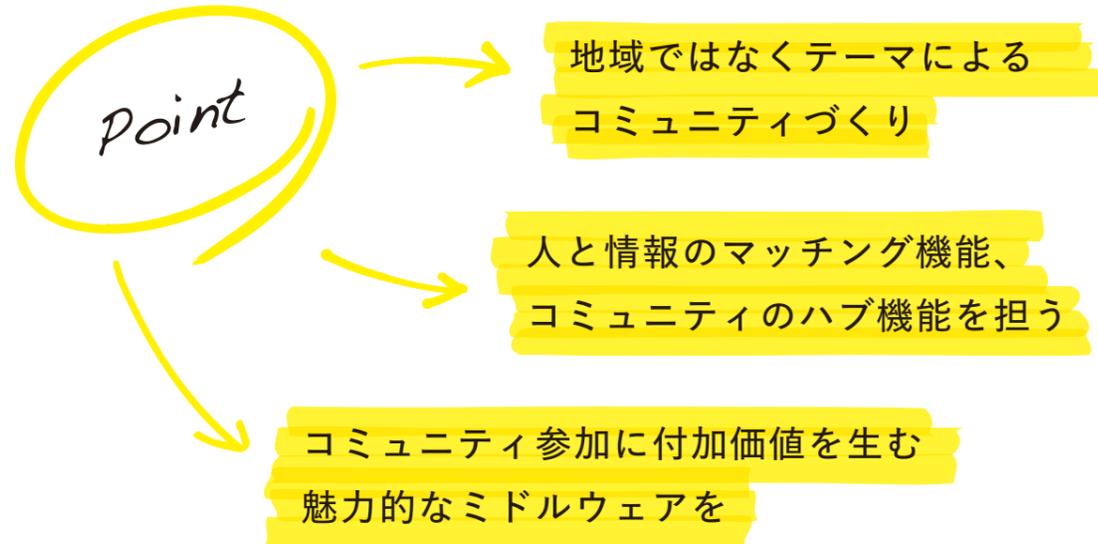
都市と地方の連携に向けて

2011年5月13日 エコツェリア（東京丸の内）

都市と地方の共生による持続的な発展を可能にするコミュニティとは何だろうか？

そのコミュニティを活かすために都市が整える機能は何だろうか？

さまざまな分野で都市と地方をつなぐ取り組みを続ける4人の担い手たちからご意見を伺った。



参加者（敬称略）

- 猪尾愛隆（ミュージックセキュリティーズ株式会社取締役）
- 小松俊昭（金沢工業大学産学連携室コーディネーター）
- 曾根原久司（NPO 法人えがおつなげて代表理事）
- 古田秘馬（株式会社 umari 代表）

※プロフィールの詳細はウェブ版 CSR レポートで紹介しています。



猪尾愛隆
いのお・よしたか

経済的な視点から見ると、森や川、海など日本が持つ資源のポテンシャルは地方に偏在しています。こうした天然資源をどのように活用していくか、長期的に考えることがこれからは必要だと思います。

昔は地域で森を支えていましたが、いまは地域主体でも50年、100年先を見据えた投資がなかなかできません。

これを「全国の森好きの集まり」のように、地域レベルからテーマ主体のコミュニティへと置き換えていけば、都市の人も参加しやすくなりますし、長期的に育てるシステムへと成長していけると思います。



小松俊昭
こまつ・としあき

地方には魅力にあふれた「人物」が多く、都会にはスキルに長けた「人材」が多いと感じています。こうした人と、地方のニーズや都市が持つポテンシャルなどの情報を、その両方をマッチングする役割を大丸有には担ってほしい。

マッチングできれば需要と供給の関係が成り立ち、事業化につながる可能性があります。大丸有は20年以上にわたるまちづくりなどの活動によって、ブランドとしての価値が確立しています。

大丸有が起点となって周辺の地域を包み込んでいく「母都市」のようなエリアを目指してほしいですね。



曾根原久司
そねはら・ひさし

これからの都市と地方の連携には、個人・企業・行政という枠を超えた、私たち NPO や丸の内朝大学のような、第三のコミュニティがいかに活躍するかだと思います。

ところがこれまででは、コミュニティ同士が結びつく場が不足しているため、単独での活動しかなかった。そこで大丸有には、コミュニティの「ハブ」となっていたきたい。

都市と地方、国内と海外の物理的な2つのハブ機能を持つ大丸有が、その役割を担えば、そこに人と知恵が集い、活動の輪が広がり、都市と地方との交流は加速していくと思います。



古田秘馬
ふるた・ひま

コミュニティの活動に多くの人を巻き込むには、なんらかの付加価値が必要です。私はそれを、ソフトでもハードでもない、いわばミドルウェアだと考えています。

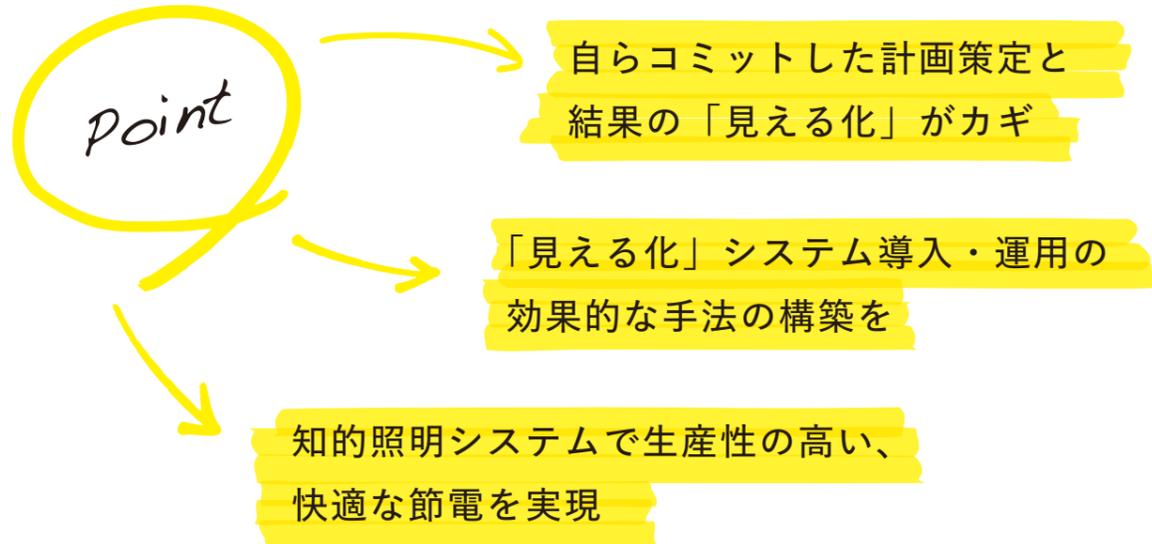
ミドルウェアとはハードやソフトに意味を持たせる「ストーリー」とか「舞台設定」のことです。多くの共感を生み人も集まる、そんな魅力的なミドルウェアをつくり出すにはアイデアが出る自由な空間と多様な人が必要ですが、丸の内朝大学はその両方を備えています。

朝大学が核になって、大丸有をもっと人材と知恵が集まる場にしていきたいですね。

快適と省エネの両立へ

2011年5月26日 エコツェリア（東京丸の内）

かつてない節電時代を迎えている日本。電力供給の絶対量が不足する中で、省エネと快適性を両立させるための「スマートコミュニティ」とはどのようなものだろうか？この時代を乗り切る知恵とアクションについて、5人の方から意見を伺った。



参加者（敬称略）

- 金子 衛 (社団法人日本ビルディング協会連合会事務局次長)
- 野崎麻子 (有限責任監査法人トーマツディレクター)
- 高見牧人 (経済産業省 資源エネルギー庁 省エネルギー・新エネルギー部 省エネルギー対策課長)
- 加山 勉 (三菱電機株式会社 営業本部 事業推進部 法人営業第一グループ担当部長)
- 三木光範 (同志社大学理工学部教授)

※プロフィールの詳細はウェブ版CSRレポートで紹介しています。



金子 衛
かねこ・まもる

ビルオーナーは、テナントから、部署・時間ごとに細分化されたエネルギー使用量の開示を求められることが多くなっています。そのためには、エネルギー管理システムによるサポートが鍵となりますが、導入費用が高額であること、運用のために専門技術者を要することなどから、大規模ビルに限られているのが現状です。中小ビルも含めて、エネルギー管理システムの導入を促進するためには、国・地方自治体による支援措置（税制・予算等）の充実、システム標準化（データ仕様やインターフェースなど）による低価格化などが必要です。

弊社の業務は、大きく「監査」と「アドバイザー」に分けられ、それぞれ働き方が異なるため、全社一律での節電対応は難しい。そこでオフィスや部署単位で節電計画を策定しています。押しつけの対策ではなく、自らの手で立案しコミットした計画ですから、“やらされ感”もなく積極的な取り組みが期待できます。課題は節電効果のフィードバックです。リアルタイムで活動の単位に対応したデータの「見える化」が実現できれば、より成果を上げることができると思いますので、ビル側と協力して取り組んでいきたいですね。



野崎麻子
のざき・あさこ



高見牧人
たかみ・まさと

今夏に向けて政府は、事業者や家庭の皆さまに節電のお願いをさせていただいています。節電対策として電力使用量の見える化も有効な手段の一つですが、システム導入の効果が十分に継続しない場合もあるので、取り組み方について関係の皆さまと議論を深めていきたい。エネルギー政策は中長期的な視点で、エネルギーセキュリティと地球温暖化対策の両面を睨んだ節電や省エネのあり方の議論を進めていきます。自然エネルギーの拡大も課題であり、新丸ビルの生グリーン電力導入における課題などの共有もお願いしたい。

節電だからといって、やみくもに照明を落とせば生産効率が低下します。生産性、快適性を落とさない節電を行うためには、電力消費量をリアルタイムで把握し、必要などころに必要な電力を供給できて、個別の節電対策の効果がわかる、節電の見える化が重要です。この見える化のシステムは、もともと工場の生産性、効率を高めるために開発されたもので技術的には完成しています。今後は、オフィスに導入するにあたり、ビルオーナーとテナント間での費用や役割をどう分担していくのかという仕組みづくりが必要です。



加山 勉
かやま・つとむ



三木光範
みき・みつり

光を分散最適化する知的照明システムのもとでは、照度を下げても生産効率は下がらない。知的照明は従来の「明るければよい」という発想を覆し、均一の照度・色温度から一人ひとりの好みや体調、業務内容に応じて変えることが可能です。また緊急節電協力警報の発令時には、照明を暗くすることで社員に認識させ、みんなが協力して需給が好転したら明るくなるように、照明をサインとすればわかりやすい。照度と色温度のように五感に訴える組み合わせが、我慢ではない“快適な”節電を実現するのではないのでしょうか。

大丸有の健康診断

大丸有のCSRアクションはどのくらい進んでいるのか。
わかりやすい数字をもとに具体的な成果を紹介していきます。

32社

大丸有に本社をおく企業のうち、 3つの代表的SRI Indexへの 組み入れ銘柄のべ数

SRIとは「Socially Responsible Investment」の略で、企業の経済的な側面だけでなく、社会的な側面にも注視して投資判断を行うというものです。「SRI Index」は、社会・環境などの分野での企業の業績を指数化して、優良な企業のみを投資の対象として組み入れたファンドで、構成銘柄に選ばれた企業は財務面だけでなくCSRの面からも高い評価を受けた企業ということになります。「Dow Jones Sustainability Index」「FTSE 4 Good Global Index」「Ethibel Sustainability Index」の3つが代表的な「SRI Index」と言われています。大丸有に本社をおく企業もそれぞれのIndexに多数組み入れられています。

Index名	組入銘柄数	
	大丸有	日本全体
DJSI	7社	30社
FTSE 4 Good	21社	189社
Ethibel	4社	21社
計	のべ32社*	のべ240社

*重複を除くと大丸有に25社

20,500人

丸の内マルシェの利用人数

2010年度は4日間、丸ビル1階のマルキューブで「青空市場×丸の内マルシェ」が開催されました。このイベントは、俳優の永島敏行氏が2005年に立ち上げた「青空市場」と、「食育丸の内」プロジェクトを推進する三菱地所グループとのコラボレーションにより、2009年度から実施されているものです。マルシェが提供する生産者と消費者そしてシェフ（レストラン等）の出会いの場では、生産者の顔が見えることによって、消費者の食材に対する信頼感・安心感も高まります。ビジネスセンターの中には一見ミスマッチな市場は、就業者や来街者に人気が高く、2010年のマルシェには合計20,500人もの方が訪れました。

年度	開催日	参加人数
2009	10月24・25日	8,500人
	3月25・26日	4,800人
2010	6月25・26日	9,500人
	10月22・23日	11,000人

2.8t-CO₂

ゼロタクシー導入によるCO₂の削減量

2010年3月から、電気自動車（EV）を利用したタクシー「ゼロタクシー」2台の運用が大丸有で始まりました。エコや省エネを求める世界的な流れの中で、電気自動車は普及しつつありますが、タクシーとして利用されるのは東京では初めてのことです。車両には「i-MiEV（三菱自動車製）」を使用しています。電動モーターで走行するので、静かで排気ガスもでない、環境にやさしいタクシーです。大丸有には電気自動車に電気を充電するための充電器の設置場所も12ヵ所と数多く設置されていて、ゼロタクシーが運行する環境が整っています。2010年3月25日から12月31日までの利用人数は2,271人。走行距離の合計は21,940.5kmとなり、この2台の導入によるCO₂削減量を試算*すると、2.8t-CO₂となりました。

*：LPGタクシーの走行距離2kmあたりのCO₂排出量は336g。i-MiEVの走行距離2kmあたりのCO₂排出量は81g。その削減量と総走行距離から求めた理論値（「三菱自動車・日産自動車試算」より）



73万t-CO₂程度
(2008年度)

71万t-CO₂程度
(2009年度)

大丸有でのCO₂排出量

2009年度は、京都議定書の第一約束期間（2008～2012年）の2年目になります。大丸有の企業・建物は、国や都の規制に則るだけでなく、さまざまな自主的取り組みによって、CO₂削減に努めています。

大丸有にある建物の2009年度におけるCO₂排出量は約71万t-CO₂*で、2008年度比で約2.7%減少しました。大丸有に65棟ある、東京都にCO₂排出量の報告が義務づけられている大規模事業所（ビル）のうち、9割にあたる58棟のCO₂排出量が削減した、という結果がでています。事業所ごとに取り組んでいる緑化推進によるヒートアイランド対策やオフィス内の省エネなどによる効果が、減少の一つの要因と考えられます。今後もハード面、ソフト面両面からより積極的にCO₂削減に取り組んでいきます。

*東京都が公表している、「地球温暖化対策計画書制度」に基づき大規模事業所（ビル）ごとに提出している「温室効果ガスの削減計画書」に記載された、大丸有にある65棟のビルの2009年度排出量実績から試算。65棟の2009年度床面積あたりの排出量を算出し、大丸有の延床面積を乗じた理論値。

217kW (2009年度) ⇒ **820** kW (2010年度)

太陽光パネルによる発電出力

再生可能エネルギーである太陽光発電は、日本国内でも普及が進んでいます。太陽光パネルは設置する場所を選ばないので、その重量に耐えることができる場所であればどこでも設置できるのですが、風の影響を受けやすいという難点があります。高層ビルの屋上は強い風が吹くことがあるため、大丸有での普及は難しいものがありますが、悪条件を乗り越えて着実に設置場所が増えています。2010年度は、東京駅東海道線ホームに453kW、三井物産本店ビル屋上に150kWが増加し、エリア合計で820kWの発電出力となりました。

ビル名	発電出力	設置年
東京駅新幹線ホーム	30kW	1993年
東京国際フォーラム	67kW	1997年
丸ビル	10kW	2002年
三菱UFJ信託銀行ビル	30kW	2003年
新丸ビル	20kW	2007年
丸の内パークビル	60kW	2009年
東京駅東海道線ホーム	453kW	2010年
三井物産本店ビル	150kW	2011年

30%

エコツェリア実証実験オフィス省電力量

新丸の内ビル10階の「エコツェリア」のオフィス部分では、2009年10月より新技術「LED知的照明システム」と「輻射空調システム」を複合導入しました。この実証実験の目的は「照明」「空調」という執務環境の二大機能において、「快適性」「省エネルギー性」の両立を実現させるというものです。1年にわたって日々の利用データを計測し、学識者のご助力を得て性能評価を行いました。その結果、両システムの併用を通じて快適な空間を実現したうえで、両システム導入後の年間消費電力は8,060kWhとなり、同ビル標準仕様相当と比較して約30%の年間消費電力削減達成を確認しました。

打ち水プロジェクト参加人数

「打ち水」は、まちの温度を下げようという、世界に誇れる江戸の知恵であり日本文化です。2010年度で5年目を迎えたこのイベントには、2009年度よりも約3割多い2,800人が参加しました。浴衣を着て「打ち水」をする人が増え、周辺の企業の人のみならず一般の人びとも参加するようになり、観光イベントとしての要素も加わりつつあります。

「打ち水」で使用する水は、ビルの排水を再利用した「中水」を、丸の内熱供給と東京国際フォーラムから提供していただいています。

実施日・会場	参加人数・団体	中水利用量	温度変化(℃)
7/30 行幸通り浴衣 de 打ち水	900人 37社・団体	600ℓ (丸の内熱供給)	32.0 → 30.0
8/2 有楽町打ち水	300人 23社・団体	300ℓ (有楽町イトシア)	31.6 → 30.1
8/4 “カルガモ” 打ち水	400人 8社・団体	300ℓ (丸の内熱供給)	37.1 → 35.1
8/6 “大手町・緑日” 打ち水	昼 400人 夜 300人 7社・団体	300ℓ (丸の内熱供給) 300ℓ (丸の内熱供給)	34.7 → 32.8 29.7 → 29.3
8/17 集まれ KIDS 打ち水	500人 11社・団体	300ℓ (東京国際フォーラム)	32.8 → 30.8

2,204人 (2009年度)
↓
2,800人 (2010年度)

上水の使用量

2010年度における、大丸有の上水道使用量実績は、599万m³でした。2009年度実績591万m³と比較すると、8万m³の増加という結果になりますが、これは2010年度から丸の内パークビルの使用量が算入されているためです。容積対象面積あたりの原単位で比較すると2009年度の0.99m³/m²から2010年度は0.97m³/m²と0.02ポイント減少し、効率的な水の利用が進んでいます。大丸有では、ビルの中水をヒートアイランド対策として行幸通りで散水したり、雨水を植栽の水遣りに使うなどの工夫をしています。今後も中水の利用など、効率的な水の利用を検討していきます。

※2010年度の大丸有の三菱地所所有 ISO14001 取得ビル20棟における、容積対象面積あたりの上水道使用量実績(原単位)に、大丸有全体の容積対象面積を乗じて求めた理論値。

599 万m³

ホテルの客室数

大丸有にあるホテルは全部で6軒*。その総客室数は1,282室です。ミシュラン東京ガイド2011には、37軒(14,603室)のホテルが掲載されていますが、そのうちの5軒(1,121室)が大丸有にあり、エリア単位では最も多い軒数です。掲載されている、ホテル数が多い他のエリアをあげてみると、汐留4軒(1,550室)、六本木・赤坂3軒(1,483室)、新宿4軒(3,176室)です。ビジネスセンターとして、日本各地のみならず、世界各国からの来訪も多いエリアとして、大丸有は今後もホスピタリティの向上を図っていきます。

*NTTタウンページでホテルとして登録されているもの。

ホテル名	客室数
フォーシーズンズホテル丸の内東京	57
丸の内ホテル	205
ホテルメトロポリタン丸の内	343
シャングリ・ラホテル東京	202
ザ・ペニンシュラ東京	314
KKRホテル東京	161

1,282 室

大丸有の緑被率

千代田区全体の緑被率は21.0%です。大丸有は人工化された地表面や道路が多い環境の中で、屋上緑化の推進や、一号館広場などで緑を増やす努力をしています。また緑被率には反映されませんが、新丸ビル等で壁面緑化の採用が進むなど、緑化推進に取り組んでいます。今後は緑の量だけでなく、生態系維持に寄与する植栽や、風が通りやすい樹形など質の向上も目指します。

※千代田区2010年調査による。前回調査(2003年)は、大手町・丸の内のみ。今回は、有楽町も含む。

6.4%

丸の内仲通りの街路樹の本数

大丸有には、美観の向上や歩行者へ日陰の提供を目的に多くの街路樹が植えられています。丸の内仲通り1.2kmの間には、ケヤキなどの樹木が8mから10m程度の間隔で197本植えられています。交差点や街区の中央付近には樹高10mを超える扇状に広がる樹形ケヤキを配し、緑陰が天蓋をつくるようにしています。仲通り以外では有楽町エリアのシナノキ、丸の内エリアのアメリカフウ、大手町エリアのカツラなど、卵型に近い樹形のものを選んで、リズムと変化のある街路景観をつくり出していくよう計画しています。

197 本

病院・診療所の数

大丸有の病院および一般診療所(歯科診療所含む)の数は88施設*1です。千代田区全体の数862施設*2のおよそ10%となっています。エリア面積も大丸有は千代田区のおよそ10%であることを考えると不思議ではない数字ですが、大丸有には住宅はほとんどなく住民数はわずか26人です。つまりこの施設のほとんどがビジネスセンター大丸有の就業者および来街者のためにあることとなります。大丸有にあるビル数は104棟。単純にビルと病院・診療所の比率を求めると、ビル1棟あたりの診療所の数は0.85となり、数字上ではほとんどのビルに何らかの医療施設がある、安心して仕事や観光ができる環境が整っていることがわかります。

*1: NTTタウンページに登録している病院・診療所の数
*2: 総務省統計局データから

88 施設

6月から9月の猛暑日数

2010年度の夏は、日本の広範囲を記録的な猛暑が襲いました。気象庁はこの猛暑を30年に1度の異常気象と認定しています。東京でも気象庁のある千代田区大手町の観測で、最高気温が35.0度以上の猛暑日が、6月～9月の4ヵ月間で13日も観測されました。特に、7月・8月はともに4日間連続猛暑日を記録しています。1990年以降の猛暑日数を見ても、2010年度の猛暑が記録的だったことがわかります。異常気象にも対応できる、大丸有としてのヒートアイランド対策を一層推進していく必要があります。

13 日

年	日数
1990	1
1991	4
1992	2
1993	8
1994	13
1995	2
1996	3
1997	3
1998	0
1999	8
2000	6
2001	6
2002	4
2003	3
2004	7
2005	1
2006	1
2007	1
2008	1
2009	1
2010	13

丸の内シャトル利用人数

大丸有を毎日12～15分間隔で巡回している「丸の内シャトル」はモーター駆動によるハイブリッド電気バスです。多様な曲線に縁取られた大きな窓が特徴的な車両は、内部も広く開放的なつくりになっています。機能面においても「低公害」「低騒音」「低床(=車椅子での乗降可能)」といった特徴を持ち、人と環境に優しいバスです。さらにこのシャトルは乗車無料なのでおサイフにも優しく、エリアの観光やビジネスの足としてご利用いただいています。2010年度は約56万もの人びとにご利用いただきました。

※丸の内シャトルは、地元企業・団体24社の協賛によって運営されています。

約 56 万人



もっと大丸有を知りたい方へ

指標の一覧

基礎指標	実績	備考
就業者数	28万6,295人	2009年。総務省「平成21年経済センサス基礎調査 町丁・大字別集計」
事業所数	4,187事業所	
住民数	26人	2011年1月時点。住民基本台帳による東京都の世帯と人口（町丁別・年齢別）
総延床面積	632ha	2009年12月1日時点。建設中を除く
建築物数	104棟	2009年12月時点。建設中を除く
緑被率	6.4%	2010年。千代田区調査結果から試算。水面を含む ⇒ 詳細 P.36
駐車場数	約1万3,000台	2010年3月時点
鉄道網	13駅20路線	13駅は大手町、東京、二重橋前、日比谷、有楽町（地下鉄について、路線の異なる同一名の駅は路線分計上） 20路線はJR13路線、都営地下鉄1路線、東京メトロ6路線
駅の乗客数の一日常	235万人	新幹線を除く。オリコム交通媒体局「Circulation transit outdoor ads サーキュレーション資料2010年度版」 JR・地下鉄・私鉄 駅別乗降人員（2008年度1日平均）
大丸有地区に本社をおく企業のうち、3つの代表的SRI indexへの組み入れ銘柄数	32社	重複を除くと23社 ⇒ 詳細 P.34
経済指標	実績	備考
大丸有地区に本社をおく上場企業の売上高合計と、日本のGDPに占める割合	124兆1,061億円 22.9%	大丸有地区に本社をおく75社 連結売り上げ 売上高合計は2009年版会社四季報秋号から（2008年度実績）
社会指標	実績	備考
病院・診療所の数	88施設	NTTタウンページに登録している病院・診療所（歯科含）の数 ⇒ 詳細 P.37
バリアフリー法の認定を受けた建物の延床面積と全体に占める割合	173.4ha（27.4%）	バリアフリー法第17条認定建築物一覧（1994年～2008年）
ホテルの客室数	1,282室	NTTタウンページに登録しているホテル6軒の総客室数 ⇒ 詳細 P.37
丸の内マルシェの利用人数	20,500人	2010年度。4日間開催したマルシェの参加人数 ⇒ 詳細 P.34
リガーレセミナー参加人数	約388人	2010年度。リガーレが12回開催したセミナーのべ参加人数
丸の内検定受検者数・合格率	受検者205人 合格率74.6%	第3回丸の内検定（2010年7月11日実施）
環境指標	実績	備考
太陽光パネルの発電出力	820kW	大丸有8カ所に設置されている太陽光パネルの発電出力合計 ⇒ 詳細 P.35
エネルギー使用量（建物など）	1万5,167TJ	大丸有地区の三菱地所所有のISO14001取得ビル20棟実績（2010年度）より推計（参考値）
CO ₂ 排出量（建物など）	約71万t-CO ₂	大丸有地区の65棟ビル実績（2009年度）より推計（参考値） ⇒ 詳細 P.35
保水性舗装が施された道路の面積	約3万7,600㎡	2011年3月時点。三菱地所都市計画事業室調べ
屋上・壁面緑化の面積	約1万2,000㎡	2011年3月時点。三菱地所都市計画事業室調べ
上水使用量	599万㎡	大丸有地区の三菱地所所有のISO14001取得ビル20棟実績（2010年度）より推計（参考値） ⇒ 詳細 P.37
事業系一般廃棄物排出量	4万814t-CO ₂	大丸有地区の三菱地所所有のISO14001取得ビル19棟実績（2009年度）より推計（参考値）
観測された猛暑日の日数	13日	2010年6月から9月における日数。気象庁の統計データから ⇒ 詳細 P.36
皇居で観測された動・植物種数	動物3,638種 / 植物1,366種	1996～2000年度。独立行政法人国立科学博物館「皇居の生物相調査（第一期）」
丸の内仲通りの木の本数	197本	株式会社三菱地所設計調べ。2011年5月末時点。 ⇒ 詳細 P.36
自然観察会への参加者数	597人	さえざり館が2010年度に61回開催したフィールドイベントへ参加したのべ人数
ゼロタクシー導入によるCO ₂ の削減量	2.8t-CO ₂	2010年3月25日から12月31日までの、ゼロタクシーの走行距離から試算 ⇒ 詳細 P.34
丸の内シャトル乗車人数	約56万人	2010年度。無料循環シャトルバス年間乗車のべ人数 ⇒ 詳細 P.37
電気自動車充電設備設置数	12カ所	丸の内パークビル、新丸ビル、日本ビル、鍛冶橋駐車場、新大手町ビル、郵船ビル、三菱ビル、国際ビル、東京国際フォーラム、東京交通会館、東京サンケイビル、丸の内中央パーク
エコツェリア実証実験オフィスでの省電力	30%	2009年10月～2011年1月の計測結果 ⇒ 詳細 P.35
エコ結び加盟店舗数	185店舗	2011年3月末時点
丸の内朝大学参加人数	1,794人	2010年度春学期・夏学期・秋学期・オープンキャンパスのべ参加人数
打ち水プロジェクト参加人数	2,800人	2010年度。イベント5日間のべ参加人数 ⇒ 詳細 P.36
エコキッズ参加人数	989人	2010年度。全20プログラムのべ参加人数
地球大学アドバンス参加人数	457人	2010年度。エコツェリアが12回開催した地球環境セミナーのべ参加人数

私たち大丸有について

大丸有について

大丸有は、東京都千代田区にある大手町・丸の内・有楽町それぞれの町名から1字をとって名づけられました。この3つの地区は、日本の発展を支えるビジネスと文化の中心地として、地理的・文化的・経済的な結びつきが強いエリアで、これまで一体となってまちづくりを進めてきました。その過程で、地権者・ビルオーナー、テナント、就業者、行政、インフラ事業者、来街者などのさまざまな人びとが有機的に連携する、ほかに例を見ないコミュニティが形づくられてきています。

大丸有のCSRについて

大丸有は、CSRに取り組んでいます。一般的にCSRは「企業の社会的責任」(Corporate Social Responsibility) のことですが、私たちのCSRは「コミュニティの社会的責任」(Community Social Responsibility) を表しています。持続可能な社会の構築に向けて、行政・企業・市民などさまざまな主体の積極的な取り組みが求められていますが、私たち大丸有にも果たすべき重要な役割や責任があると考えています。

大丸有が「持続可能な地域へと向かっているか?」「日本の・世界の持続可能性に貢献しているか?」。このレポートを通じて、みなさまに現在の状況を評価いただき、大丸有のCSRへの取り組みへのご理解とご支援をいただければ幸いです。

大手町

大手町は、江戸城大手門の前に広がるまちだったため「大手町」と名づけられました。江戸時代には武家屋敷が建ち並んでいたこのまちには、その後金融機関や新聞社などが多く立地してきました。戦後、日本の金融センター・情報センターとしての役割を担ってきました。大手町駅には地下鉄5路線が通り、屈指のアクセスの良さを誇ります。

丸の内

丸の内は、江戸城内の内堀と外堀の間に位置する地域です。城の一番外側の「三の丸」の内側という意味で「丸の内」と名づけられました。東京駅の正面に位置し、その立地の良さから日本を代表する企業が数多く本社を構え、戦前・戦後の日本の経済センターとしての役割を担ってきました。

有楽町

有楽町は、織田信長の弟、織田有楽斎長益の屋敷が数寄屋橋御門のあたりにあったことが地名の由来です。帝国劇場や有楽町マリオン、東京国際フォーラム、よみうりホールなどいくつもの文化施設があり、多くの人びとを楽しませてきました。また、銀座とも接するこのまちはショッピングや飲食の施設も多く、大手町や丸の内でも働く人びとも立ち寄る場所となっています。



このレポート、および大丸有について、もっと詳しく知りたい方はウェブサイトをご覧ください。冊子と同内容のPDFもウェブサイトからダウンロードできます。

大丸有のCSRアクションの今、を知りたい方は、丸の内地球環境新聞をご覧ください。

<http://ecozeria.jp/csr2011>

<http://ecozeria.jp/shimbun>

大丸有コミュニティ SR 推進委員会

大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会

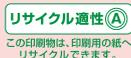
特定非営利活動法人 大丸有エリアマネジメント協会（リガール）

エコツェリア協会（一般社団法人 大丸有環境共生型まちづくり推進協会）

三菱地所株式会社



<http://ecozeria.jp/csr2011>



この報告書は、「東日本大震災義捐金付き」カーボンオフセット印刷物です。
また、リサイクル対応型資材を使用しているため、印刷用の紙にリサイクルできます。
不要になった際は、古紙回収・リサイクルに出してください。



この報告書は、環境に配慮した「グリーンプリンティング認定工場」で、
「古紙 100% 再生紙」、VOC 削減効果の高い「水なし印刷」「W2 インキ」を使用して作られました。
さらに、CTP（Computer to Plate）の採用により製版用現像液やフィルムなどの中間材料を全廃しました。